古英語における過去分詞移動について*

夏　思洋

1. 導入

古英語における過去分詞は、「habban+能動分詞」と「bēon+受動分詞」という二つの構文形式で現れる。本稿では、XIA (2021) による通時的研究を参考にし、古英語のテキストを用いて、これらの要素の語順パターンを調査する。XIA (2021) では、初期英語の受動文では、分詞-遊離数量詞語順や分詞-副詞語順が一定の割合で容認されていたことが観察されている。

(1)　a.　ac　hys　wundra　næron　**awritene**　$\boxed{\text{ealle}}$　(Part-FQ)
but　his　wonders　weren't　written　all
'but his wonders *were* not all written'　(coaelhom, ÆHom_6:318.1025 / Xia (2021: 225))

b.　and cwædon þæt se tima forþ agan wære and þæt folc wære **gewergod** $\boxed{\text{þearle}}$　(Part-Adv)
and said that the time away passed were and that people were wearied exceedingly
'and said that the time had been passing away, and that the people were exceedingly wearied.
(coaelive, ÆLS_[Martin]:1416.6907 / Xia (2021: 225))

一方、現代英語ではこのような語順は非文法的である。本稿は、古英語における過去分詞移動について考察するものである。特に、過去分詞が他の構文要素である遊離数量詞や副詞とどのように関連しているかを詳細に調査し、これらの語順現象の統語的特徴を理論的に説明することを試みる。

2. データ

本稿のデータは、Xia (2021) による bēon と共起する受動分詞と遊離数量詞や副詞との相関語順、および YCOE コーパスを用いた habban と共起する過去分詞構文に基づいている。表 1 は、受動分詞と遊離数量詞・副詞の相対語順を示している。初期英語（EOE）では、分詞-遊離数量詞語順の生起数が 0 件であるが、後期英語（LOE）では増加し、一定の割合で確認される。

表 1. 受動文における過去分詞と遊離数量詞・副詞の相対語順(Xia (2021: 226))

Period	Participles with FQ			Participles with Adverb		
	FQ-Part	Part-FQ	Part-FQ (%)	Adv-Part	Part-Adv	Part-Adv (%)
EOE	4	0	0%	215	8	3.6%
LOE	51	17	25%	375	128	25.4%
Total	55	17	24%	590	136	18.7%

表 2 は、能動分詞と遊離数量詞・副詞の相対語順を示している。EOE では両方の語順の生起数が 0 件であるが、LOE では分詞-副詞語順が 2 件確認される。

表 2. 能動文における過去分詞と遊離数量詞・副詞の相対語順

Period	Participles with FQ			Participles with Adverb		
	FQ-Part	Part-FQ	Part-FQ (%)	Adv-Part	Part-Adv	Part-Adv (%)
EOE	1	0	0%	17	0	0%
LOE	2	0	0%	50	2	3.8%
Total	3	0	0%	67	2	2.9%

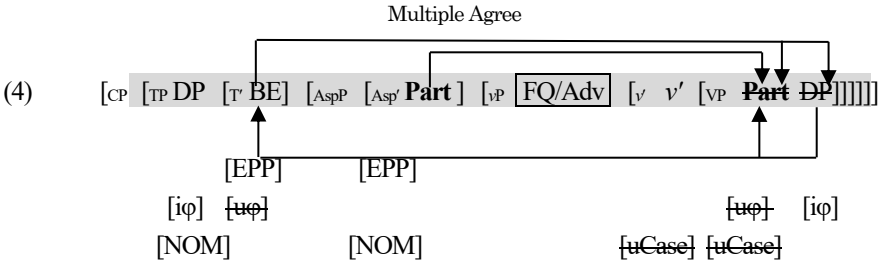
3. 理論的背景

現代イタリア語では、受動分詞が主語と性、数で一致する屈折形態素を持つのに対し、能動分詞は一致する屈折形態素を持たない。この対照的な振る舞いは古英語にも見られ、古英語の受動文では、過去分詞が主語と一致する屈折形態素を持つことが確認される。さらに、アイスランド語でも同様の非対称性が観察される。古英語の過去分詞の約 3 割が屈折語尾を持ち、habban と共起する分詞は屈折語尾を持たないことが多いが、bēon と共起する分詞は屈折語尾を持つ傾向がある。これらの事実を踏まえて、本稿は Hiraiwa (2005)で提案した Multiple Agree を採用しつつ、若干の修正を加える。具体的には、複数の Probe が複数の Goal と一致関係を結ぶことができると仮定する。また、Chomsky (2001, 2008) の理論に基づき、CP フェイズと 2 種類の vP フェイズ（強フェイズ v*P と弱フェイズ vP）を設定する。強フェイズ v*P ではフェイズ不可侵条件に厳格に従う一方、弱フェイズ vP では外部からのアクセスが可能である。

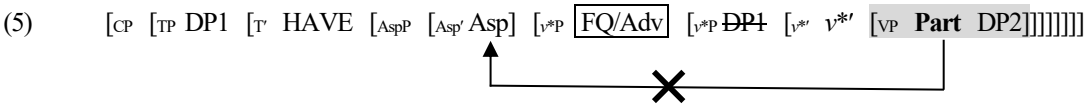
* 本研究は JSPS 科研費（課題番号 24K16097）の助成を受けたものである。

4. 分析

Cinque (1999)に従い、遊離数量詞と副詞の位置が普遍的に固定されていると仮定する。この仮定の下で、初期英語における分詞-遊離数量詞、分詞-副詞の語順は分詞の移動の結果と考えることができる。この節では、分詞移動の有無が一致屈折の豊かさに関連していると主張する。具体的には、古英語やイタリア語のような豊かな一致屈折を持つ言語では分詞が高い位置に移動することが可能であり、現代英語のように一致屈折が乏しい言語では、分詞は基底生成位置に留まると仮定する。Nishio (1989)は、GB 理論を基に、英語の受動分詞が形容詞と区別する必要がなく、すべての受動分詞が[+V]素性を持つと主張している。Biberauer & Roberts (2010)は、動詞の移動は各機能主要部が持つ EPP 素性によって引き起こされると提案しており、受動分詞の移動先は AspP の主要部位置と仮定する。これらの仮定に基づき、受動文における分詞移動の具体的な派生プロセスを説明する。まず、性、数、格の屈折形態素が具現化されるため、受動分詞が解釈不可能な φ 素性と解釈不可能な格素性を持つ要素と仮定する。機能主要部 T と Asp がそれぞれ Probe として、[uφ]と[uCase]を持つ受動分詞と[iφ]と[uCase]を持つ名詞句を Goal として探査する。これらの解釈不可能な素性の値を付与するために、T、Asp、分詞および名詞句が同時多重一致関係を結ぶ。そこから、T が名詞句と分詞に主格を付与し、主語名詞句は T が持つ EPP によって TP 指定部に牽引され、分詞は Asp が持つ EPP によって Asp 主要部へ牽引される。その結果、すべての解釈不可能な素性の値が付与され、派生が収束する。vP は弱フェイズであるため、分詞は v 主要部に、名詞句は vP のエッジに循環的に経由する必要がなく、直接それぞれの最終着地点に移動されると考える。これにより、フェイズ不可侵条件を違反せずに、フェイズ領域へのさらなる Agree 操作が可能となり、受動分詞は移動することができる。



一方、能動文では、分詞は屈折形態素がほとんど具現化されないため、Agree 操作が行われず、v*P フェイズの転送領域に留まる。これにより、外部からのアクセスが遮断され、過去分詞の移動が制限される。この構造では、能動分詞が目的語と同じフェイズ領域にあるため、目的語と一致することが可能であり、フェイズ不可侵条件の違反にはならない。



5. 結論

本研究は、古英語における過去分詞の移動現象を中心に、その統語的特徴と理論的背景を分析した。特に、分詞の統語的特性を詳細に探求し、現代英語や他言語との比較を通じて、分詞の位置変動が一致屈折の豊かさによって影響を受ける可能性を示唆した。古英語における能動文と受動文での過去分詞の扱いを理論的に分析した結果、一致屈折が豊かな言語（例：イタリア語、古英語）では、分詞が高い位置に移動することが可能であることがわかった。一方、一致屈折が限られている言語（例：現代英語）では、分詞は基底生成位置に留まる傾向がある。

参考文献：Biberauer, Theresa and Ian Roberts (2010) “Subjects, Tense and Verb-movement,” *Parametric Variation: Null Subjects in Minimalist Theory*, ed. by Theresa Biberauer, Anders Holmberg, Ian Roberts and Michelle Sheehan, 263–302, Cambridge University Press, Cambridge. / **Chomsky, Noam (2001)** “Derivation by Phase,” *Ken Hale: a Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1–52, MIT Press, Cambridge, MA. / **Chomsky, Noam (2008)** “On Phases,” *Foundational Issues in Linguistic Theory: Essays in Honor of Jean-Roger Vergnaud,* ed. by Robert Freidin, Carlos P. Otero and Maria Luisa Zubizarreta, 133–166, MIT Press, Cambridge, MA. / **Cinque, Guglielmo (1999)** *Adverbs and Functional Heads: A Cross-linguistic Perspective*, Oxford University Press, New York. / **Hiraiwa, Ken (2005)** *Dimensions of Symmetry in Syntax: Agreement and Clausal Architecture*, Doctoral dissertation, MIT. / **Nishio, Miho (1989)** “Feature Specification of Passive Participles,” *English Linguistics* 6, 18–35. / **Xia, Siyang (2021)** “Passive Participles Movement in the History of English,” *JELS* 38, 225–230.